

1. 旧神光寺跡の踏査

諫早 直人・山内 愛弓・井川 瑞季・菱田 哲郎

はじめに

神光寺は兵庫県多可郡多可町加美区岩座神にある真言宗の寺院である。寺歴によれば白雉年間（650—654年）、法道仙人によって開かれたとされ、宝暦年間（1751—1764年）に編纂された『播磨鑑』にはかつては堂塔伽藍多く、一百余りの坊舎があったが兵乱によって衰退したと伝わる（平野編1958）。現在の神光寺本堂は、昭和6年（1931年）の火災後に再建されたもので、この火災によって多くの建物、寺宝・文書類が焼失してしまったが、鎌倉時代後半の作とみられ、山門（仁王門）に今も立つ金剛力士像（多可町指定文化財）を通じて、かすかにかつての栄華をしのぶことができる。

『多可郡誌』によれば現在の神光寺（標高約450m）は、元亀天正年間（1570—1592年）の戦乱により荒廃した後、宝暦年間に明道上人が往寺の末光院を改め、復興したものという（多可郡教育会編1923）。発掘調査がおこなわれたことはないが、寺院後背にそびえる千ヶ峰中腹（標高600～650m）には石垣や階段、中世期（12～14世紀）の遺物が多く散布する平坦地があり、「寺屋敷」という遺称地も残っていることから、『播磨鑑』の記す神光寺旧伽藍の中核はこちらにあったと推定され、「旧神光寺跡遺跡」（加美町教育委員会2005）、または「神光寺跡遺跡」（兵庫県遺跡地図）として周知の埋蔵文化財包蔵地となっている。この度、多可町教育委員会の安平勝利氏の案内で、一帯の踏査を実施し、いくつかの新知見を得たのでここに報告する。

【調査日】2023年3月28日

【調査参加者】（五十音順。所属はすべて調査時点）

安平勝利（多可町教育委員会）、諫早直人、上杉和央、岸泰子、菱田哲郎（以上、教員）、井川瑞季（大学院博士前期課程）、川西優帆、松岡茉陽琉（学部4回生）、山内愛弓（学部3回生）、橋本唯（学部2回生）

（諫早直人）

1. 多可町域の中世の遺跡

現在の神光寺本堂の前面には岩座神神光寺遺跡（図1-1・2）が広がっている。平成17年（2005）に発掘調査が実施され、13～18世紀の石垣・石積みとそれらによって区画された人工的な平坦地などが検出されたほか、13世紀前半～16世紀後半を中心とする土器類が出土している（加美町教育委員会2005）（図3）。寺院に直接関連する建物跡は検出されなかったが、これらの調査成果から岩座神神光寺遺跡での活動は13世紀代に始まっていたこと、14世紀～15世紀にかけて大半の

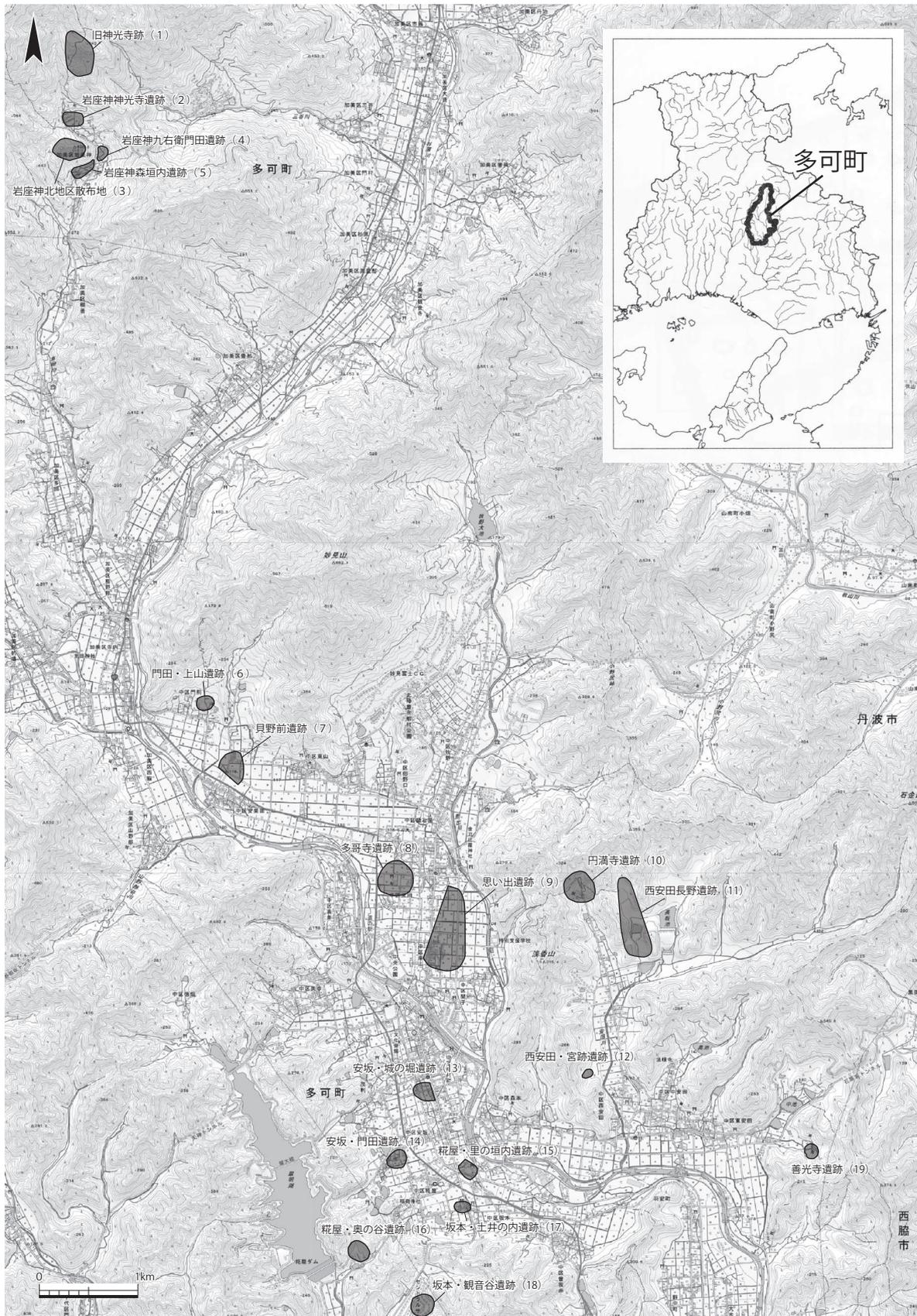


図1 多可町域の中世遺跡 (S=1/60000)

石垣が築かれ、幾度かの改修と平坦地の拡張がおこなわれながら繁栄したことなどが判明した。16世紀後半になると遺物量が減少し、遺跡周辺での活動は下火になるが、17世紀後半～18世紀前半の梵鐘鑄造遺構が検出されるなど寺院としての活動は続けられていたと考えられる。

岩座神神光寺遺跡の南正面にある山の尾根頂部に位置する岩座神北地区散布地（図1-3）では、経塚を含む中世期以降の遺物が散布し、岩座神神光寺遺跡との関連性も考えられている（加美町教育委員会2005）。そのほか、岩座神集落には中世期の遺物散布地として岩座神九右衛門田遺跡（図1-4）、岩座神森垣内遺跡（図1-5）などが広がる。

旧神光寺跡が存在したと推定される11～14世紀の多可町域には、円満寺遺跡（図1-10）や西安田長野遺跡（図1-11）、糶屋・奥の谷遺跡（図1-16）、善光寺遺跡（図1-19）といった山林寺院も存在していたことが判明している。また、平野部の思い出遺跡（図1-9）や安坂・城の堀遺跡（図1-13）、貝野前遺跡（図1-7）などでは当時の生活状況の一端を垣間見ることができる遺物が多数出土しており、遍在的に集落が形成されていたことが分かる（宮原ほか2004）。多可町の中世はそうした集落社会と一定の関係を持ちながら山林寺院が発展していった時期と言える。

2. 旧神光寺跡の踏査

(1) 平坦地

旧神光寺跡は千ヶ峰標高600～730mの位置に広がる（図4）。標高590mには平坦地と池があり、「通称名寺ン谷」と記された看板が設置されている。寺に関する通称名や人工的な平坦地が存在することから、旧神光寺跡に関連する施設が存在した可能性がある。標高

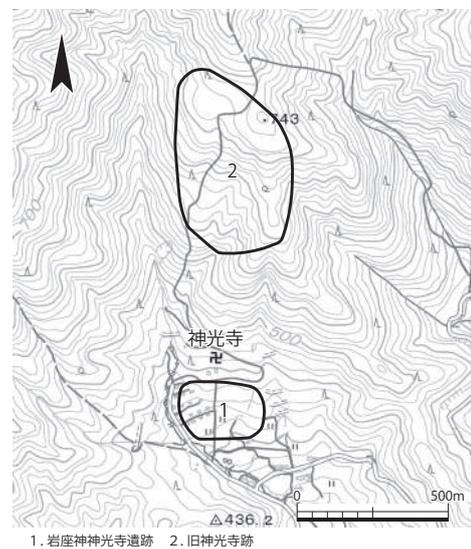


図2 岩座神神光寺遺跡と旧神光寺跡の位置図 (S=1/25000)



図3 岩座神神光寺遺跡周辺地形図 (S=1/7500)

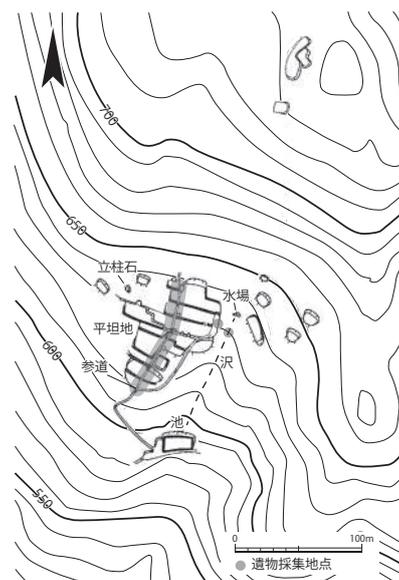


図4 旧神光寺跡周辺地形図 (S=1/6000)



写真1 旧神光寺跡の石垣（南から）



写真2 旧神光寺跡の参道（北から）



写真3 旧神光寺跡の平地（東から）



写真4 旧神光寺跡の池（北から）

610～640mには、階段状の参道を中心に左右に石垣が築かれていることが確認できた（写真1・2）。石垣の上には平坦地が造成されており（写真3）、ここに坊院もしくは寺院に関連する施設が立ち並んでいたと考えられる。また、標高550～600mの間ではV字状に掘り切られた旧道を確認しており、これが参道として機能していたものと考えられる。

最下段の石垣から最上段の石垣に至るまでの参道で須恵器片を8点、石垣上の平坦地で須恵器片を8点採集した（図4）。（山内愛弓）

（2）水場

平坦地奥の東方に地図上に「水場」と記される場所があり（図4）、現在も水が湧き出ている。山中において水の確保はとても重要であり、当時においても水源として利用されていたと考えてよいだろう。この水場から南方に向かって緩やかな傾斜が続き、沢を形成している。さらに斜面を下っていくと数段の石積みによる堤でせきとめた池状遺構が確認される（写真4）。現在水はほとんど貯まっていないが、池の南側の堤の東方隅には一部石組が確認できない部分があり、池の水をここから下へ排水していたとみられる。

今回の踏査では、水場下の斜面において土師器片や須恵器片を数点採集した。池状遺構からは遺物は採集できず、時期は不明である。

（3）採集遺物

旧神光寺跡では過去に分布調査が実施されており、詳細な採集地点は明示されていないものの、須恵器碗や甕を中心に11～14世紀頃の遺物が報告されている（図5）。

今回の踏査で採集した遺物は平坦地で16点、水場で5点を数える。いずれも破片であり、ほとんどが須恵器であった。図化できた資料はごく一

部で、図6に示したとおりである。1は土師器皿Nで口縁部が外反し、端部上面は面をなす。平尾編年（平尾2019）に照らしあわせれば、11世紀初頭～中頃にかけての土師皿とみられる。2は須恵器壺Qの口縁部である。口縁部は強いナデにより屈曲し、端部を丸くおさめる。端部から頸部にかけてほぼ垂直に屈曲し、緩やかに外反していく。内面には自然釉がかかる。兵庫県志方窯跡群の投松2号窯や中谷1号窯において同様の口径や端部をつまみ出す形態の壺が焼成されていることから（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2001）、年代の上限を9世紀前半に置くことができる。3は須恵器椀である。平高台の底部をなし、底部には糸切りによる切り離しの痕跡が残る。体外外面や高台側面には回転ナデの痕跡が明瞭に残る。年代は10世紀末葉～12世紀の間におさまると考えられる。1、2は水場下の斜面から、3は最下段の石垣上の平坦地からの採集である（図4）。（井川瑞季）

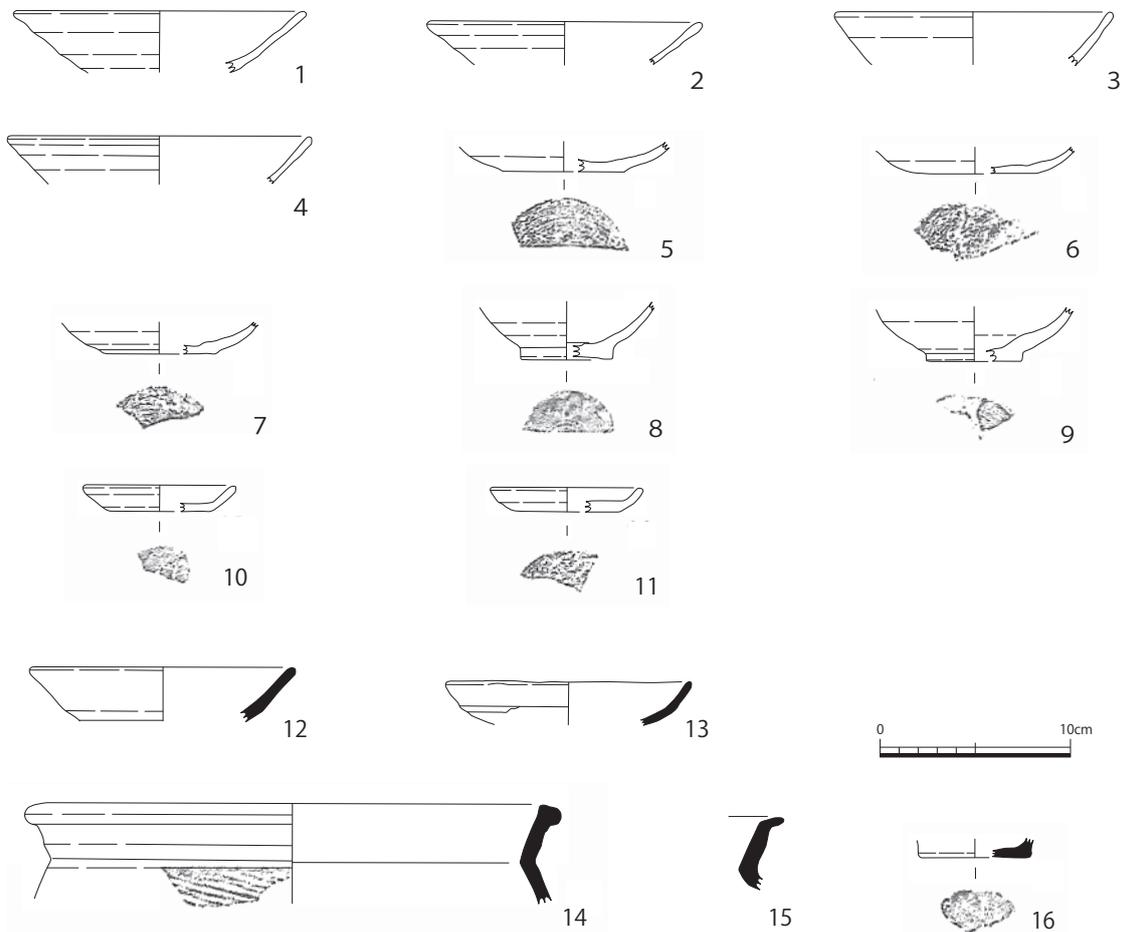


図5 旧神光寺採集遺物（S=1/4）宮原 2010 報告遺物を再トレース

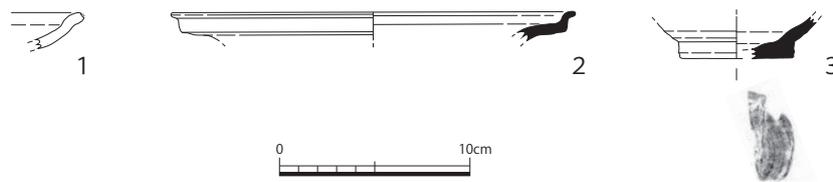


図6 旧神光寺採集遺物（S=1/4）

おわりに

神光寺は、岩座神の奥に位置し、この谷間の集落の形成にとっても重要な役割を果たしたことが予測される。その旧伽藍は千ヶ峰という名山につらなる山塊にあり、霊地としての条件を兼ね備えている。これまでも踏査がおこなわれ、平坦地の略測がおこなわれてきたが、今回の踏査において、改めて現況を確認することができた。南向き斜面の尾根上に平坦地を設けていることに加え、すぐ隣接する谷奥に水場があり、山寺にとって水の重要性を改めて認める結果になっている。下流にある池も含め、山寺の空間構成を考えるうえで重要な遺跡であることがわかる。採集遺物では、資料の多さからは平安時代後期に活発な活動をおこなっていると想定できるが、従来の年代よりも古い9世紀前半の資料があり、この山寺の創始の時期を遡らせることが可能になった。山林修行の活性化による山寺の草創がいつにあるのかは、各地域において重要な検討課題であるが、こうした遺跡の新知見からその解が得られるものと確信する。

(菱田哲郎)

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(B)）「古代後半期の山寺の総合的探索にもとづく仏教浸透過程の研究」（22H00720）の成果の一部である。

参考文献

- 加美町教育委員会 2005 『岩座神神光寺遺跡』（加美町文化財報告 9）
- 多可郡教育会（編）1923 「神光寺」『多可郡誌』
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2001 「志方窯跡群2—投松支群一」『兵庫県文化財調査報告』217
- 平尾政幸 2019 「土師器再考」『洛史』（研究紀要第12号）公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 平野庸脩（編）1958 「【萬靈山神光寺】」『地志 播磨鑑』播磨史籍刊行会
- 宮原文隆ほか 2004 「中町の歴史的環境」『中町の遺跡Ⅱ』兵庫県多可郡中町教育委員会
- 宮原文隆 2010 「多可町の山林寺院—発掘調査・分布調査からみた多可町の山林寺院—」『書写山円教寺と兵庫県下の山岳寺院』大手前大学史学研究所

編集後記

歴史学科2年次の学生を対象に「文化遺産学フィールド実習」の授業を設け、長年にわたって基礎的な調査を実践する場として活用してきた。これまで、数多くの市町でお世話になり、夏休みを中心にフィールドワークをおこない、そのそれぞれの取り組みについては、その後の調査などを経て、単発で報告などにとりまとめてきた。今回、兵庫県多可郡多可町で分野横断的な調査をおこなうことができ、また科研のテーマである山寺研究を裨益する研究成果がまとまったため、本書を編むことになった。多大なご援助をいただいたみなさまに改めて謝意を表したい。(ひ)

表紙・裏表紙写真

上左：五霊神社の調査風景（菱田哲郎撮影）

上中：旧神光寺跡の調査風景（菱田哲郎撮影）

上右：岩座神地区文書の調査風景（東昇撮影）

下：岩座神地区の棚田景観（安平勝利撮影）

裏表紙：神光寺仁王門と千ヶ峰（岸泰子撮影）



京都府立大学文化遺産叢書 第29集

播磨神光寺と岩座神地区の文化遺産

編集 菱田 哲郎（京都府立大学文学部教授）
岸 泰子（京都府立大学文学部准教授）
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5
発行日 2024年3月29日
印刷 株式会社 北斗プリント社
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2